

2022年4月6日(水)

老球の細道663号

春休みのトピック

会津バスケットボール協会 室井 富仁

「鬼滅の刃」のキャラクターを真似して、100円ショップで購入したおもちゃの刀を携え「爺の型、水の呼吸、全集中!」と孫を喜ばせようとしても長くは持たない。小さい子と遊ぶのはバスケットボールの指導よりも難しい。孫たちの春休みももうすぐ終わりになる。

休み中に会津地区のスポーツ界では2つのトピックがあった。一つは、野球で只見高校が春の甲子園選抜大会に出場したこと。もう一つは、会津高校女子バスケットボール部主将の佐藤由菜さんが勉強では最難関と言われる東京大学に現役で合格したことである。

【只見高校甲子園へ】

会津の地から63年ぶり2回目の甲子園出場である(1回目は1959年会津高校。その時の捕手だった渋谷先生に私は高校時代世界史を習った)。21世紀枠といえ甲子園は甲子園。4千人弱の豪雪地帯で生徒数も少なく、地元選手のための歴史的快挙である。

対戦相手が大垣日大高校ということで、この甲子園常連校に完璧にやられ、延長のない甲子園大会なのでとんでもない点差がつくのだろうと予想していた。しかし、試合が始まると大方の予想に反して(失礼!)6-1のそこそこのゲームとなった。選手の表情は明るく、伸び伸びとして、守備などは常連校と見栄えしないくらい上手だった。

改めて思ったことは、やはり同じ高校生同士の戦い、名前負けさえしなければ同等に戦える。また、只見町のように小さな地域でも、小、中、高校と一貫指導で育った選手が地元で頑張り続ければ甲子園、全国大会も夢ではないということである。地産地消の快挙である。会津地区のバスケットボールも可能であることを確信した。

【佐藤さんの東大合格】

多くの進学校では「文武不岐」「文武両道」を校是と掲げるが、その究極のゴールは最難関の東京大学合格だろう。私の記憶では会高バスケット部史上3人目の快挙となる。彼女の普段の練習に対する姿勢、学校生活の姿勢など真摯な人間性について顧問から話を聞いていたので、今回の歴史的な快挙を大いに喜んだ。また、彼女のお爺さんも生涯バスケット選手として有名だったので、「この爺さんにこの孫あり」で大泉逸郎の♪孫♪が頭をよぎった。

多くの進学校と言われるところでは部活動を勉強の敵として迫害を受けることがある。そんな中で佐藤さんのがんばりは、そのような誤解と偏見を破り、文武両道を目指して日々努力する生徒たちに勇気を与えたことだろう。そして、文武不岐とあるように勉強と部活動、スポーツは別々のものではなく関係しあいながら高めていくものであることを再認識したことだろう。特にバスケットボールそのものが「文武不岐」である。上達するには英語を知り、力学、心理学、哲学など色々な学問を動員しなければならない。

地元の小学生、中学生にバスケットだけであればOK、バスケットだけやっていればOKという狭く、寂しい風潮に春の嵐を吹き込んでくれたに違いない。